※内容一部抜粋

【⑦：正面を向いて】

仁　「あなたが彼女達を心から慕って、大切に思ってることは、
ちゃーんと知ってるから」

仁　「何度身請(みう)けを断られても、あなたを諦めきれない男の戯れだから、
気にしないで」

仁、立ち止まる。

【⑤と⑬の間】

仁　「でもさ……」

ヒロイン、立ち止まって仁を振り返る。

【①と⑨の間】

仁　「もし……もし俺が――！」

飛んできた煙管(きせる)が仁の頭に当たる。（ＳＥ）

仁　「いっった！　っ――！　……え、なに……?!」

仁、地面に落ちた煙管(きせる)を見つける。

【①　と⑨の間：下を見る】

仁　「……煙管(きせる)？」

芍薬、籬越しに現れる。

芍薬「なにしてんのよ」

【①と⑨の間：⑩の少し上の方を見る】

仁　「芍薬花魁……！　え、もしかして、この煙管投げたのって花魁ですか?!」

芍薬、肯定。

仁　「これまだ火ついてるじゃないですか……！　危ない……。
ていうか大籬の間からよく投げれましたね……?!」

芍薬「あたしの可愛い妹分に手ぇ出そうとするからよ」

仁　「手ぇ出すもなにも……花魁の妨害で口説く以前の問題なのですが……？」

芍薬、ヒロインに「戻っておいで」と声をかけて去る。

【①と⑨の間】

仁　「はぁ……相変わらず、芍薬花魁はあなたには甘いね」

ヒロイン、煙管が当たった頭を心配する。

【①】

仁　「あぁうん、大丈夫。もう痛くないから」

ヒロイン、謝罪する。

仁　「いや、謝らないで。俺に対するあの反応も、
花魁があなたを大切に思ってるからだって、わかってるから」

仁　「（煙管を拾う）」

仁　「禿の頃から可愛がっていた君に辛い思いをさせたくなくて、
花魁が客のツテを使って四郎兵衛会所に入団させてくれたって、
前に話してくれたよね」

仁　「そんな話聞かされたら、口説くところをどんなに邪魔されても、
花魁を嫌いにはなれないよ」

ヒロイン、お礼を言う。

仁　「（小さく笑い）、お礼を言われることはなにもしてないよ」

仁　「それじゃあ、また花魁に怒られる前に、俺は行こうかな。はい、これ」

仁、ヒロインに煙管を差し出す。

仁　「煙管、花魁に返しておいてもらっていいかな」

ヒロイン、頷いて煙管を受け取る。

仁　「ふっ、それじゃあ――」

【③寄り】

仁　「（頬へキス）」

ヒロイン、驚く。

【①寄り】

仁　「またね」

仁、去っていく。（ＳＥ：ＦＡ）

○吉原遊郭・仲の町（夜）

ＢＧ：人々の声（少なめ）
ＢＧ：遊郭ＢＧＭ

消えた遊女についての調査を頼まれたヒロイン。
ヒロイン、調査に向かう途中で仁に遭遇し立ち止まる。（ＳＥ）

【⑨】

仁　「こんばんは。今日もお疲れ様」

ヒロイン「……今日も来たの？」

仁　「うん、今日も会いに来たよ」

ヒロイン「悪いけど、今日はもう帰って」

仁　「え……なんで？　俺まだ来たばっかりなのに……」

ヒロイン「今日は忙しいから」

仁　「……なにかあったの？」

ヒロイン「大したことじゃない。ごめん、もう行かないと」

ヒロイン、歩き出し仁を通り過ぎる。

【⑤と⑬の間：⑬の方を向いて】

仁　「龍雲屋（ろうたん）の『楓（かえで）』っていう遊女がいなくなっちゃったんだってね」

ヒロイン、脚を止め振り返る。

【①と⑨の間：⑨の方を向いて】

仁　「もしかして、これからその調査に行くの？」

ヒロイン「なんで知ってるの」

【①と⑨の間：ヒロインの方へ振り返る】

仁　「（小さく笑い）、俺、結構色んなこと知ってるんだよ？」

ヒロイン、調査を任されたことを説明。

仁　「なるほど。それで、その遊女についての調査をあなたが頼まれたんだ」

仁　「さすが団長さん。
吉原の女性達を誰よりも想っているあなたに調査を頼むなんて、
よくわかってるね」

仁　「それで？　これからどうするつもりなの？」

ヒロイン、見世（みせ）に行くと答える。

仁　「あぁ、なるほど。まずは『楓（かえで）』っていう遊女がいた見世（みせ）に聞き込みか……」

仁　「よし、じゃあさっそく向かいますか」

ヒロイン「まさか付いてくるつもり？」

仁　「いやいや、違うよ。
ただ、あなたが行く場所と俺の行きたい場所が同じなだけ」

ヒロイン、呆れる。

仁　「（小さく笑う）。ほら、行こう」

仁・ヒロイン、共に歩き出す。（ＳＥ）

○吉原遊郭・籠雲屋前（夜）

仁・ヒロイン、籠雲屋へやってくる。（ＳＥ）

【③：正面を向いて】

仁　「ここか。例の遊女が所属してた見世、籠雲屋か……」

ヒロイン、頷く。

仁　「この時間帯はまだお客さん少ないし、増える前にさっさと――」

見世の中から大きな物音。（ＳＥ）

仁　「（驚き）ッ?!」

仁・ヒロイン、同時に驚く。

仁　「……なんの音だ？　（駆け出す）っ！」

仁・ヒロイン、急いで見世の中へ。（ＳＥ）

【②：正面を向いて】

仁　「あれは……ここの楼主さんと……禿？　え？　なにして――」

楼主が禿を叩こうと手を上げる。

※中略

仁・ヒロイン、歩いていく（ＳＥ：ＦＡ）

○吉原遊郭・裏門（夜）

仁・ヒロイン、裏門の前で立ち止まる。（ＳＥ）

【③】

仁　「とうちゃ～く。この裏門から吉原の外に出たんだよね」

仁　「確か、裏門の傍に遊女の簪（かんざし）が落ちてたとかって」

ヒロイン「そのことも知ってるの？」

仁　「うん、知ってる。ふふん、物知りでしょ」

ヒロイン、呆れる。

仁　「裏門はカードキーを持っている限られた人間しか開けられない」

仁　「カードキーを持っているのは、あなた達四郎兵衛会所（しろべえかいしょ）と、
吉原を運営する上の連中」

仁　「ただの中見世（なかみせ）の遊女が、裏門のカードキーなんて持ってるはずがない」

仁　「つまり――」

ヒロイン「誰かが手助けをした」

仁　「（小さく笑う）、やっぱり、あなたも同じ考えだったね」

仁　「つまり、足抜けを手助けしたやつがいる」

ヒロイン、頷く。

仁　「裏門の利用履歴とかは？」

ヒロイン、裏門に近づく。（ＳＥ）
端末を操作すると、エラー音が鳴る。（ＳＥ）

【⑫】

仁　「あ～……消されてるのかぁ……」

仁　「まぁそうだよな～……ってことは、あの監視カメラももしかして？」

ヒロイン、仁の元へ戻る。（ＳＥ）
ヒロイン「遊女が逃げたであろう時間帯だけ消されてた」

【①と⑨の間】

仁　「ですよね～。しかも逃げたであろう時間帯だけ消されてるのか……」

※中略

仁　「いや、あなたには頭が上がらないなぁ～と思って」

仁　「足抜けだったとしても、遊女の無事が確かめられるなら、それでいいの？」

ヒロイン、頷く。

仁　「ほんっとにカッコいいなぁ～、俺の好きな人は。（笑う）」

ヒロイン、照れる。

仁・ヒロイン、歩き出す。（ＳＥ）

仁　「それじゃあ、この後はどうする？　もう一度籠雲屋（ろうたん）で話を聞いてみる？
それか、近くで事情聴取してみるとか――」

ヒロイン、唐突に誰かに抱き着かれる。

ヒロイン「（っ?!（抱き着かれる）」

仁・ヒロイン、咄嗟に立ち止まる。

【⑧】

仁　「――っ！　どうしたの？」

仁、ヒロインに抱き着く禿（かむろ）に気が付く。

仁　「……あれ？　君はあの時の……籠雲屋（ろうたん）の、禿（かむろ）……？」

○吉原遊郭・裏門前（深夜）

樹、裏門へやってくる。

裏門で待ち構えていたヒロイン、警棒を伸ばし樹へ向ける。（ＳＥ）

樹、驚く。

仁、ヒロインの隣へ歩いてくる。（ＳＥ）

【⑭→⑦へ移動：正面を向きながら】

仁　「こんばんは。こんな夜更けに、裏門に一体何の御用ですか？　樹（いつき）さん」

樹「なぜここに……」

仁　「あなたがここに来ることはわかってましたよ」

【⑦：ヒロインを見る】

仁　「ね？」

ヒロイン、樹が遊女を足抜けさせたことを指摘。

樹、驚く。

【⑦：正面を向きながら】

仁　「その反応……やっぱり、『楓（かえで）』という遊女を足抜けさせたのは

――樹（いつき）さん、あなたなんですね」

※中略

仁　「（小さく微笑む）、それじゃあ、またね」

通話が切れる。（ＳＥ）

○束麗屋（たばうら）・座敷（夜）

ＢＧＭ（ＦＩ）

束麗屋（たばうら）、とある襖の前。

ヒロイン、襖の奥へ声をかける。

【⑨外側】

仁　「どうぞ」

襖が開かれる。（ＳＥ）

仁　「っ！　……（見惚れる）」

仁　「（小さく微笑む）……こんばんは」

ヒロイン、「失礼してもよろしいでしょうか」

仁　「うん、もちろん。隣に来て」

襖が閉じる。（ＳＥ）

ヒロイン、仁の隣へ向かい座る。

【⑦】

仁　「（見惚れる）……」

ヒロイン「どうかしましたか？」

【⑧】

仁　「ん？　あ、いやごめん……」

仁　「今日は……一段と綺麗だね」

ヒロイン、驚く。

仁　「いつもの制服姿も凛々しくて素敵だけど、着物姿もすごく似合ってる」

仁　「（少し照れながら）……あなたがここに来るまで、
結構長かったような気がする」

仁　「緊張してたからかな」

ヒロイン「『待たせときなさい』って言われたので」

【⑦】

仁　「え？　『待たせときなさい』って……もしかして芍薬花魁が？」

ヒロイン「上妓ほど客を長く待たせるものだと」

※中略

仁、ヒロインに向き合う。

【⑦：ヒロインの方を見る】

仁　「だから……あなたを迎えに来た」

ヒロイン、驚く。

【①】

仁　「初めてあなたを見かけた時、自警団員として仕事をする姿が、凛々しくて、すごく綺麗だと思った」

仁　「一緒に過ごすうちに、この吉原にいる遊女や花魁達を心の底から慕っているのがわかって」

仁　「彼女達をこんなに大切に想ってくれている人がいるんだって、嬉しかった」

仁　「自分のことを、『慈しんでもらえるような女じゃない』って言うなら、そう思えなくなるくらい、俺が愛してあげたいと思った」

仁、ヒロインの手を取る。

仁　「この吉原で、遊女や花魁達を護りたい。彼女達を護ること、それが自分の使命だって、前にそう言ってたよね」

仁　「俺の奥さんになれば、今までと変わらず、吉原で四郎兵衛会所（しろべえかいしょ）を続けられる」

仁　「他の男に身請けされるより、ずっといいと思うよ？」

ヒロイン「見世に出ない私を指名する男なんていない」

仁　「そんなのわからないよ。だって現に俺が指名してるんだもん」

仁　「俺みたいな奴が、今後出てきて、あなたを指名するかもしれないでしょ」

仁　「それに、俺はずっと、あなたを身請けしたかったんだよ」

仁　「（呼吸を一回）……好きだよ」

仁　「俺に、あなたの一生を買わせて下さい」

ヒロイン「今のあなたなら、もっとランクの高い遊女も買えるのに」

仁　「確かに、今の俺なら、花魁だって買えるだろうね」

仁　「でも、俺が欲しいのはあなただから」

仁　「どんなに高い金額を払っても、あなた以外身請けするつもりはないよ」

ヒロイン「私には、優れた教養も芸もなにもない……

慈しんでもらえるような女じゃ……」

仁　「優れた教養も芸もいらないよ」

仁　「そんなものが無くたって、あなたは……あなたが、
俺にとっては『慈しむべき女性』なんだよ」

ヒロイン、仁へ優しく触れるだけのキスをする。

【①寄り】

仁　「（キスを受ける）っ！」

ヒロイン、仁から離れる。

仁　「（口が離れる）……（小さく笑い）、俺からするつもりだったのに……」

仁　「俺と、一緒に来てくれる？」

ヒロイン、頷く。

仁　「（嬉しそうな反応）っ……！　やっと、頷いてくれた……」

仁　「（優しいものから徐々に深くなっていくキス）」

キスで徐々にＦＯ。